様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １８ 日現在

機関番号：２４５０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｈ００７０２

研究課題名（和文）感情労働の地域・階級間比較にみる「近代家族」、フェミニズム思想の越境性とその限界

研究課題名（英文）transnationlism and its limitation of the modern family idea and feminism in the comparative analysis between Britain and its colonies, and classes within Britain

研究代表者
中沢　葉子（並河葉子）（Namikawa, Yoko）

神戸市外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：１０２９５７４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,110,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、19世紀のイギリス本国の下層階級や植民地の奴隷、20世紀のイギリスへの移民女性労働者など、周縁的な立場にいた女性たちの生の実態を分析し、彼女たちの思いとミドルクラス女性の推進するフェミニズムとの乖離を「家族」の在り方を中心に考察した。
　欧米のミドルクラスのフェミニストが理想とする社会や「家族」の実現には、それを支える人びとの存在が不可欠であり、周縁的な立場の女性たちがそれを担った。ミドルクラス女性が救済対象とした女性たちは、フェミニストの理想とは異なる生を自身で戦略的に選択したが、資本主義的な社会の中で「家族」の離散やケアの収奪を経験した。フェミニズムの結果は立場により異なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　イギリスなど近代ヨーロッパのミドルクラスに生成、定着していくジェンダー規範は欧米のミドルクラスに特殊なものであり、本国の下層階級や植民地の奴隷、移民女性には共有されなかった。文明化の対象とされた周縁的な立場の女性たちは受動的にそのような規範を受け入れたわけではなく、独自の生を戦略的に模索した。女性たちがフェミニズムによって統合されるよりも、それぞれの生の違いが固定化することになった。フェミニズム思想がグローバライズしても、ケア分野に対する不十分な経済的評価は変わらず、それを担う人々の周縁的な立場を固定化し、社会の再生産が危うくなる構造が生まれた。これは、現代の社会の問題に与える示唆も大きい。

研究成果の概要（英文）： In this project,the realities of the life of women in marginal positions, such as in the lower classes in Britain, slaves in the British colonies in the 19th century and female immigrant workers who came to Britain in the 20th century were focused in order to analyze the gap between the feminist family ideal which was proposed by the western middle class feminists and those who were outside the circle.To realize the ideal society and family set forth by the western middle class feminists,it was essential to have people to do the domestic works and to support their life.It was those marginal women who took on these roles.Although the middle-class feminists tried to civilize them for relieving from their oppressed situation, women in marginal position did not passively accepted the middle class feminist ideal, but strategically pursued their own agency. They,however,often experienced a cycle of dispersion of their own family and deprivation of care, contrary to the feminist ideal.

研究分野：近代史

キーワード：女性　子ども　帝国　奴隷　労働　移民

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

1960 年代以降、政治運動としてのフェミニズムの高揚を背景に、歴史学の分野でも女性史、ジェンダー史が大きな進展を見せた。同時期、「社会史」の隆盛ともあいまって、イギリス、フランスのフェミニズム思想と「近代家族」の関係についても分析が進み、「近代家族」がイギリスやフランスの特定の階層特有の価値規範やライフスタイルをモデルとして成立してきたこと、それが普遍的な家族モデル、あるいは「近代化」の象徴として非ヨーロッパ世界にも紹介されていったことも明らかにされている。従来の研究対象となってきた女性たちは、特定の階層以上に属し、コミュニティやヴォランタリ組織での活動を通して社会で一定の発言力や影響力を行使するとともに、女子高等教育などを通じて世界的なネットワークを構築して地域を超えて思想を共有し、世代を超えてそのネットワークを継承していた。ただし、こうした女性たちの背後には、自ら労働者として生き、次世代の労働力を生み出す役割も負わされながら、そうしたネットワークとは無縁に生きた女性たちがおり、彼女たちこそが社会の大半を占めてきた。従来の女性史研究では十分に検討されてこなかった、周縁的な立場にいる女性たちが、欧米のミドルクラスの女性たちが提示するフェミニズムや家族の理想像をどのように受け止めたのかについて、19 世紀から 20 世紀にかけてのイギリス本国および植民地、中東地域の状況について考察する必要があると考え、研究プロジェクトを立ち上げた。

２．研究の目的

本研究は、最新の女性史のみならず歴史学全般の動向や成果を踏まえながら、これまでのフェミニズムや女性史研究では十分に取り上げられることがなかったイギリスの下層階級や植民地の奴隷、移民としてイギリスにわたった女性労働者たち、中東地域で近代的な女子教育に取り組んだ人々など、周縁的な地域や立場の女性たちの実態を歴史的に検証することで、近代社会が求める女性像や家族ノカタチ、あるいはフェミニズム思想が目指す女性たちの姿とそうした周縁的な立場の女性たちの実相との乖離を再検討することを目指した。従来の研究では、こうした女性たちは欧米のミドルクラス女性たちによって文明化の対象として扱われてきていたが、資本主義が深化する中で彼女たち自身がどのように生きようとしたのか、これまで拾われてこなかったそうした女性たちの声、思いや「文明化の使命」の一環として行われた様々なソーシャル・リフォームへの反応などに注目しながら、近代化が女性たちの生にもたらした変化をとらえることを目指した。とりわけ、周縁的な立場にいた女性たちの「働き方」や家族の中での役割がどのように変化したのかに注目し、「感情労働」といわれるケア労働と彼女たちとの関係性について検証した。それにより、普遍的とされた「近代」思想および近代社会の多様性を析出し、実際は虚構でしかない「普遍」性を前提とするがゆえに近代社会が抱えてきた問題点・矛盾点を具体的に明らかにし、きわめて現代的な問題でも労働におけるジェンダー格差の生まれる背景について、地域や階層の異なる女性たちの「近代化」への受け止め方の違いへの注目にしつつ、それぞれが共有する要素を抽出することを目指し、「普遍的」とされた「近代的女性モデル」の限界を明らかにすることを試みた。

３．研究の方法

共同研究者それぞれが本研究プロジェクトに関連する自身の研究テーマに沿って研究しながら、毎年共同で関連学会でのシンポジウムを行うことで、成果をメンバー間だけでなく関連分野の研究者とも共有し、さらに新たな研究発展の方向性を

歴史学的手法が中心ながら、メンバーの鳥山は人類学的なアプローチを中心にしていたことから、歴史学と人類学の手法を相互に参照しながら文献資料やインタビュー内容をそれぞれの視点から議論し、分野横断的な手法で解析した。

また、文献資料はすでに公刊されている雑誌やイギリスやフランスのアーカイブ所蔵の書簡類、インターネットで公開されるようになったデータベースなどを使用するが、とくに、奴隷貿易や解放奴隷のデータベースは近年急速にオンラインでの公開が進むそうしたデータベースを積極的に活用した[1]。

４．研究成果

研究チームとしての成果は、以下の 3 点になる。

① 西洋史学会小シンポジウム(2020 年 12 月 12 日)

「周縁からのフェミニズムの再検討ーイギリス女性たちに見る Our Story と our stories のはざまー」

18 世紀末からイギリスの女性たちは本国および帝国の女性たちを対象とする様ざまな救済活動を展開し、連帯を模索するようになった。運動では時間、空間をまたいで女性ならではの共感と連帯の可能性が前提とされてきた。しかしながら、運動の実態を検討すると、「女性」という言葉で一括したときに不可視化されがちな共感の限界や連帯を阻む壁が常に存在したことが分かる。本シンポジウムでは異なった地域、時代に焦点あて、女性たちの間を隔てる壁が、階層やエスニシティといった軸に沿って再生産され続けてきた構造について考えた。

並河は、反奴隷制運動の中で本国イギリス女性が西インドの女性の奴隷たちに向けた眼差しと西インドの奴隷たちのリアクションを軸に、両者が異なるものを求めていたことを明らかにした。

森本は、子ども支援チャリティに関わった女性たちが担ったさまざまな役割と、そこに生じていた「女性の仕事」の階層化と周縁化を取り上げた。

奥田は 1970 年代～1980 年代のブリテン女性のアンチ・アイリッシュ・レイシズムに焦点を当て、女性の運動において無意識のレイシズム「人種意識」による分断が存在したことを示した。

イングランドの女性たちの活動は、基本的には（白人）ミドルクラス女性たちが主導してきた。彼女たちが語る「私たち女性」の物語(Our Story)は、（白人）ミドルクラス女性たち

---

[1] **代表的なものは次の 2 つになる。**
Slave Voyages (https://www.slavevoyages.org/) 2023 **年** 5 **月** 30 **日最終アクセス**
Liberated Africans (https://liberatedafricans.org/public/index.php) 2023 **年** 5 **月** 30 **日最終アクセス**

が主人公の物語であり、その外側にこの範疇には入らない多くの女性たちによるそれぞれの「私たちの物語（our stories）」が存在した。これまでの女性史では見落とされがちであった Our Story と our stories の関係性に注目し、二つの間の境界が双方からの働きかけにより、現在に至るまで変動し続けていることを明らかにした。

また、「女性たち」が、その中に分断を抱えつつもジェンダーの壁を乗り越えようと活動してきた結果、21 世紀を迎えて「女性たち」と「男性たち」の間にかつて存在した境界もあらためて流動化し、再編が急速に進みつつある。

② ジェンダー史学会　第 17 回研究会パネル E 報告

本パネルでは男性の空間として描かれてきたイギリス帝国史（この中にはイギリス本国も含まれる）をジェンダーの視点で分析することで新たに見える帝国の構造とそれが示唆するものを議論した。

並河は、18 世紀末から 19 世紀初頭、労働力として遠く離れた場所から帝国内に移入された「奴隷」という「労働力」人口を維持するために女性の奴隷たちに対してとられた改善策をめぐる奴隷の女性たちの反応を取り上げる。女性の奴隷たちは、プランテーション所有者や植民地側の思惑とは異なる行動をとったことが記録から垣間見える。彼女たちの静かな怒りや諦念を、労働者であり、産む性でもある女性の奴隷たちの行動から読み解くことを試みた。

森本は、男女の性比がまだ大きかった 19 世紀に、本国から帝国の白人入植植民地に渡った労働者階級のイギリス人女性に注目する。彼女たちは、長い船旅や現地での新生活にどのような不安をもち、現地でどのような＜空気＞や視線にさらされたのか。報告では、帝国移民という選択をした彼女たちが、それぞれの植民地でおかれた環境にどのように向き合い、生きたのかについて、新たな考察の可能性を示した。

奥田は戦後イギリス本国に移民として入ってきた女性たちの中でも東欧とアイルランドからの「ホワイト」の移民たちの誰が「他者」なのかを為政者と移民それぞれの視点から検討する。「他者性」が不可視化されがちでありながらも必ずしもホスト社会へのスムーズな包摂につながるとは限らなかった白人移民女性たちの思いに注目しながら、イギリス社会とマイノリティの関係を検討した。

ディスカッサントには日本史を専門とする長を迎え、感情をキーワードに帝国を読むこころみを日本史側とも共有し、帝国という空間におけるジェンダー史の可能性について検討した。

三本の報告に共通するのは、本国を含むイギリス帝国で働き、生きた女性たちの存在の重要性である。彼女たちの生は周縁的なものとしてこれまで本格的に検証の対象とされることはなかったが、それぞれの時代、政治の場でも女性たちの労働や働く女性たちの家族の在り方は大きな関心であった。それは、常に帝国の生存戦略の生命線となる労働力確保や社会秩序の維持と結びつくものであったことが為政者たちにも認識されていたからである。三つの時代それぞれに「稼ぎ手としての男性と家庭を守る妻」というジェンダー規範が存在する一方、ここに取り上げる女性たちはそれとは異なる生き方を余儀なくされた、あるいは選択した人びとである。本国でも「帝国」に編入された植民地空間でも、「帝国」という場は新しいジェンダー規範の誕生を後押しし、人口の管理にまつわる生殖やセクシュアリティについての管理が厳格になっていった。

当事者の女性たちは為政者たちの思惑をどのように受け止め、それぞれの人生を生きよ

うとしたのかについての検証は進んでいない。本格的に語られることの少なかった女性たちの生を可視化する本パネルの試みをきっかけに、イギリス帝国における女性の移動に注目した研究が、イギリス帝国史、グローバル・ヒストリーとジェンダー史のこれからの研究の広がりの可能性を示すことができたのではないだろうか。

本来的なグローバル・ヒストリーはイギリス帝国以外も視野に入れたものであるもの、イギリス帝国の当初からみられるグローバルなヒトの移動を検証するこころみからは、現代的なグローバルなヒトの移動との重なりが多くみられる。これは、ケア労働者のグローバルな移動を現代的な特殊な現象とするのではなく、より相対化して近代史の文脈の中でとらえなおすことの必要性を示唆しているといえよう。

③ ヴィクトリア朝文化研究学会 2022 年度大会　ラウンドテーブル

外で稼ぐ夫と主婦として家庭を守る妻、両親に慈しまれる子どもという近代家族モデルは、本来白人中流階級の価値観を体現したものであったが、より広範な社会層にも広まり、イギリスでは本国の下層階級や帝国植民地の被支配民族、さらに解放奴隷にたいしても家族の望ましいあり方として提示された。だがこのような周縁的階層の多くの家族の現実の姿はこの理想像とは異なり、とくに親子の一方が不在状態となる〈親子分離〉を経験していた。親子の別れの悲劇や孤児の苦難はヴィクトリア朝文化のポピュラーな主題であったが、それは理想としての家族モデルや、そこから乖離した現実の家族の姿とどのような関係にあったのだろうか。本報告は〈親子分離〉という現象に注目し、ヴィクトリア期の家族の観念とその実相について、この時代の帝国の遺産である現代における家族や移民の問題をも視野に入れた新たな方向からの分析と展開を試みた。

並河は奴隷貿易廃止後のシエラレオネ社会において奴隷船から解放された人びとのその後を新しく公開されつつある資料を用いて検討した。大西洋奴隷貿易や奴隷制においては、子どもがかなり取引されていたこと、親子の離隔がほとんど問題視されていなかったこと、親から引き離された子どもたちは「文明化」の名のもとにイギリス本国と同じカリキュラムの教育などを受けたが、その後徒弟などに出されることも多かったことなどが明らかになった。

森本は 19 世紀半ばに子どもたちの福利として行われたチャイルド・リムーヴァルによって親子の離隔を経験した下層労働者階級の家族を取り上げた。こうした階層では子どもたち自身が家族の中で育児や経済的な貢献をしていたが、そうした担い手を喪失することになった家族の生活実態や家族観について検討した。

奥田は、第二次世界大戦後の 1950 年代から 60 年代にイギリスに西インドから移民した女性労働者の子どもについて論じた。同時期のイギリスでは結婚における夫婦間の愛情を強調する「友愛結婚」や幼児は母親が養育すべきであるという「5 歳児神話」が強調された。母親の移民後にイギリスに残された子どもたちの語りなどから、彼ら自身に対するイギリス社会の反応などを検討した。

以上 3 つの報告から、資本主義的な経済構造が浸透するのに伴う社会の変革に伴って、それを支えた周縁的な立場の家族はイギリス社会が理想とした親子や家族の関係からは大きく乖離した実態を経験することになる矛盾を明らかにした。

このほかに、メンバーが各自で当プロジェクトの研究テーマを追求するなかで出した成果を単著の著書や論文として発表している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計16件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 並河葉子	４．巻 275
２．論文標題 〔書評〕平田雅博著『ブリテン帝国史のいま』（晃洋書房、2021年3月刊）	５．発行年 2023年
３．雑誌名 西洋史学	６．最初と最後の頁 76-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Nobuko Okuda	４．巻 8
２．論文標題 Book Review：Kiyotaka Sato　ed. Memory and Narratives, First Series, 12 volumes	５．発行年 2021年
３．雑誌名 The East Asian Journal of British History	６．最初と最後の頁 79-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 奥田伸子	４．巻 87
２．論文標題 書評　L.ダヴィドフ、C.ホール著　『家族の命運』	５．発行年 2021年
３．雑誌名 『社会経済史学』	６．最初と最後の頁 71-73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 森本真美	４．巻 19
２．論文標題 〔書評〕 Tamara S. Wagner, The Victorian Baby in Print : Infancy, Infant Care, and Nineteenth-Century Popular Culture	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ヴィクトリア朝文化研究	６．最初と最後の頁 278-282
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉村（森本）真美	4．巻 37
2．論文標題 「十九世紀イギリスの刑務所改革と囚人労働 ―『不自由な労働力』の視点から」	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『神女大史学』	6．最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉村（森本）真美	4．巻 19
2．論文標題 書評 Tamara S. Wagner, The Victorian Baby in Print : Infancy, Infant Care, and Nineteenth-Century Popular Culture	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『ヴィクトリア朝文化研究』	6．最初と最後の頁 278-282
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奥田伸子	4．巻 748
2．論文標題 「書評と紹介：武田尚子著『戦争と福祉 ： 第一次大戦期のイギリス軍需工場と女性労働』」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『大原社会問題研究所雑誌』	6．最初と最後の頁 96-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 並河　葉子	4．巻 17
2．論文標題 書評　堀内隆行『異郷のイギリス―南アフリカのブリティッシュ・アイデンティティ』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ヴィクトリア朝文化研究	6．最初と最後の頁 154-158
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鳥山　純子	4．巻 6
2．論文標題 書評　クリスチャン・ヨプケ著『ベール論争―リベラリズムの試練』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 女性とジェンダーの歴史	6．最初と最後の頁 104-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鳥山　純子	4．巻 726
2．論文標題 読書案内　「ムスリムの家族」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 歴史と地理　世界史の研究260	6．最初と最後の頁 40-43
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鳥山　純子	4．巻 21
2．論文標題 現代エジプトにおける高齢者介護―家族のダイナミクスに注目して	5．発行年 2020年
3．雑誌名 ジェンダーフォーラム年報	6．最初と最後の頁 115-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鳥山純子	4．巻 16
2．論文標題 中東ジェンダー研究の挑戦―ジェンダー化されたオリエンタリズムを超えて―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 国際ジェンダー学会誌	6．最初と最後の頁 20、33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鳥山純子	4．巻 6
2．論文標題 書評　クリスチャン・ヨプケ著『ベール論争―リベラリズムの試練』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 女性とジェンダーの歴史	6．最初と最後の頁 103、105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 鳥山純子	4．巻 21
2．論文標題 書評　Kevin Gray, Hassan Bashir, and Stephen Keck編　_Western Higher Education in Asia and the Middle East: Politics, Economics, and Pedagogy_	5．発行年 2018年
3．雑誌名 ジェンダー史研究	6．最初と最後の頁 179、181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Nobuko Okuda	4．巻 16
2．論文標題 Comments on Pamela Cox ‘the impact of ‘child removal in nineteen and early twentieth century Britain: a life course approach’ in Forum Modernisation, Women and Children : ‘child removal’ in Britain and beyond : A life-course approach,	5．発行年 2019年
3．雑誌名 パブリック　ヒストリー	6．最初と最後の頁 29, 24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 奥田伸子・ブロンウェン・ウォルタ	4．巻 6
2．論文標題 「アイリッシュ・ディアスポラの中の女性」	5．発行年 2019年
3．雑誌名 女性とジェンダーの歴史	6．最初と最後の頁 58, 77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計18件（うち招待講演　4件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 並河葉子
2．発表標題 「西インドにおける女性の奴隷の移動と自由と不自由」
3．学会等名 ジェンダー史学会第19回年次大会（招待講演）
4．発表年 2022年

1．発表者名 並河葉子
2．発表標題 「奴隷制と家族――シエラレオネと西インドの事例から―」
3．学会等名 ヴィクトリア朝文化研究学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 並河葉子
2．発表標題 「女性たちの「生」を可視化する―ジェンダーから見るイギリス帝国―」
3．学会等名 ジェンダー史学会第18回年次大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 森本真美
2．発表標題 シンポジウム『ヴィクトリア朝イギリスの家族―周縁的家族と＜親子分離＞』　趣旨説明、第二報告「「救済」がもたらしたもの―チャイルド・リムーバルと被支援家族―」
3．学会等名 ヴィクトリア朝分文化研究学会
4．発表年 2022年

１．発表者名 森本真美
２．発表標題 「女をめぐる「感情」―帝国のジェンダーとセクシュアリティ」パネル報告「女性たちの「生」を可視化する―ジェンダーからみるイギリス帝国」
３．学会等名 ジェンダー史学会第18回年次大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 奥田伸子
２．発表標題 「母親の移民後に－西インドに「残された」子どもたちと家族再結合をめぐって」
３．学会等名 ヴィクトリア朝文化研究学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 奥田伸子
２．発表標題 「第2次世界大戦直後における「白人」移民女性とイギリス社会ー戦後イギリスにおいて「他者」とは誰であったかー」
３．学会等名 ジェンダー史学会第18回年次大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 並河葉子
２．発表標題 周縁からのフェミニズムの再検討－イギリス女性たちに見る0ur Storyとour storiesのはざま、「女性たちの「生」を可視化する―ジェンダーから見るイギリス帝国―」
３．学会等名 日本西洋史学会第70回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 森本真美
２．発表標題 「19世紀イギリスの子ども支援チャリティと女性たち」
３．学会等名 日本西洋史学会第70回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 奥田伸子
２．発表標題 「ブリテン女性と北アイルランド紛争――レイシズム・フェミニズム・ホワイトネス」」
３．学会等名 日本西洋史学会第70回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 並河　葉子
２．発表標題 帝国史と社会史
３．学会等名 東洋大学人間科学総合研究所、公開セミナー「社会史再考　6」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 鳥山　純子
２．発表標題 ムスリムの日常、あるいはイスラームのある日常ーあるエジプトの家族の話ー
３．学会等名 日本中東学会第25回公開講演会「素顔の中東・イスラーム」（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 鳥山　純子
２．発表標題 中東における「ろくでなし」ジェンダー学の可能性
３．学会等名 国際ジェンダー学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Junko Toriyama
２．発表標題 The elderly care in contemporary Cairo and its possible effect on the patriarchal family
３．学会等名 Seminaire Dynamique du genre en Afrique in EHESS, Paris
４．発表年 2020年

１．発表者名 奥田伸子
２．発表標題 「科学の制度化とジェンダー　―　D.ホジキンを中心に―」
３．学会等名 第68回　日本西洋史学会小シンポジウム：近代イギリスにおける科学の制度化と公共圏
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yoko Namikawa
２．発表標題 Rethinking British Foreign Societies: Their Impcat on the Social Reform in the Long Nineteenth Century
３．学会等名 Political Economy Tokyo Seminar,（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Junko Toriyama
２．発表標題 人的資源開発の民族誌、2000年代エジプトの学校教育市場で取引されるもの
３．学会等名 日本学術振興会カイロ研究センター講演会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Yoko Namikawa
２．発表標題 書評　堀内隆行『異郷のイギリス』
３．学会等名 第19回　関西イギリス史研究会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計8件

１．著者名 フィリッパ・レヴァイン、並河葉子、水谷智、森本真美	４．発行年 2021年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 352
３．書名 イギリス帝国史	

１．著者名 長沢　栄治、鳥山　純子	４．発行年 2021年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 252
３．書名 フィールド経験からの語り	

１．著者名 大野誠	４．発行年 2021年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 320
３．書名 近代イギリス科学の社会史	

１．著者名 山口　みどり、弓削　尚子、後藤　絵美、長　志珠絵、石川　照子	４．発行年 2023年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 320
３．書名 論点・ジェンダー史学	

１．著者名 鳥山純子	４．発行年 2022年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 432
３．書名 「私らしさ」の民族誌	

１．著者名 木畑洋一、安村直己	４．発行年 2023年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 320
３．書名 『岩波講座世界歴史　16巻　国民国家と帝国　19世紀』	

１．著者名 鳥山純子・嶺崎寛子（訳）	４．発行年 2018年
２．出版社 書肆心水	５．総ページ数 351
３．書名 ムスリム女性に救援は必要か	

１．著者名 南塚信吾、大塚修、三好唯義、杉田英明、加藤祐治、東田優博、並河葉子、有山輝雄、土屋由香他	４．発行年 2018年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 322
３．書名 情報がつなぐ世界史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	奥田　伸子 (Okuda Nobuko) (00192675)	名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授 (23903)	
研究分担者	鳥山　純子 (Toriyama Junko) (10773864)	立命館大学・国際関係学部・准教授 (34315)	
研究分担者	吉村　真美（森本真美） (Yoshimura Mami) (80263177)	神戸女子大学・文学部・教授 (34511)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会 　日本アフラシア学会関西支部ワークショップ	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 　京都歴史学工房　人類学の現在と歴史学	開催年 2019年～2019年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関